

第2章 平成24年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行っている。具体的には、展示・情報公開活動として、当館展示室において年度内に3回前後の企画展示を行うこと、各種メディアを用いて遺跡及び収蔵資料の情報を公開すること、教育活動としては年度内に1回の市民対象公開授業を開催すること、そして出張展示やワークショップの開催、講演会等への講師派遣など、学内外の要望に応じた地域連携・生涯学習支援活動を実施することである。

平成24年度は、展示・情報公開活動として、第33、34回となる企画展を開催した。また、平成22年度に実施した山口県大学博物館連携事業を発展解消させ、平成23年度より新たに開始した山口県大学ML(ミュージアム・ライブラリー)連携事業を継続実施した。その他、当該年度より本学委員会である山口大学所蔵学術資産継承検討委員会の事業成果展「宝山の一角」共催館として、展示室の提供と展示構築・広報支援などを行った。情報公開としては、引き続き見島ジーコンボ古墳群の出土資料再調査を実施し、調査報告書を刊行した。社会教育活動に関しては、例年通り農学部附属農場との共催により、第12回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう7－』を開催した。

当年度は、本発掘および予備発掘が必要な工事計画が多かったため、埋蔵文化財保護業務が多忙となり、9月から翌年1月まで展示室を閉鎖せざるを得なかった。そのため、総入館者数は1,072人と4年連続千名の大台は超えたものの、前年度と比べると約28%の減少を見た(表6・7)。博物館施設として長期の休館は避けたいところであったが、本学における当館の基幹業務を考慮した上での苦渋の決断であった。次頁より平成24年度に実施した展示・情報公開活動、社会教育活動の概要を報告する。

表23 埋蔵文化財資料館利用者の推移

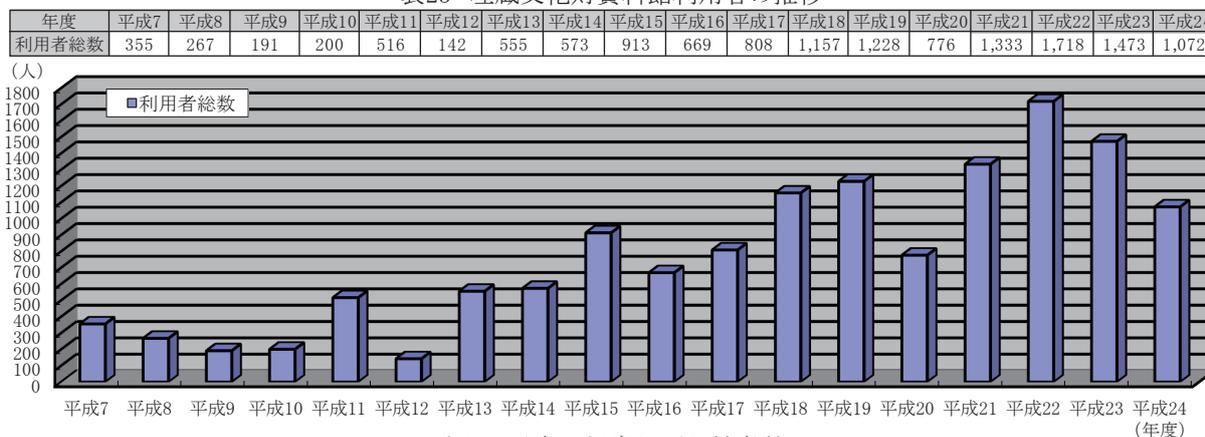
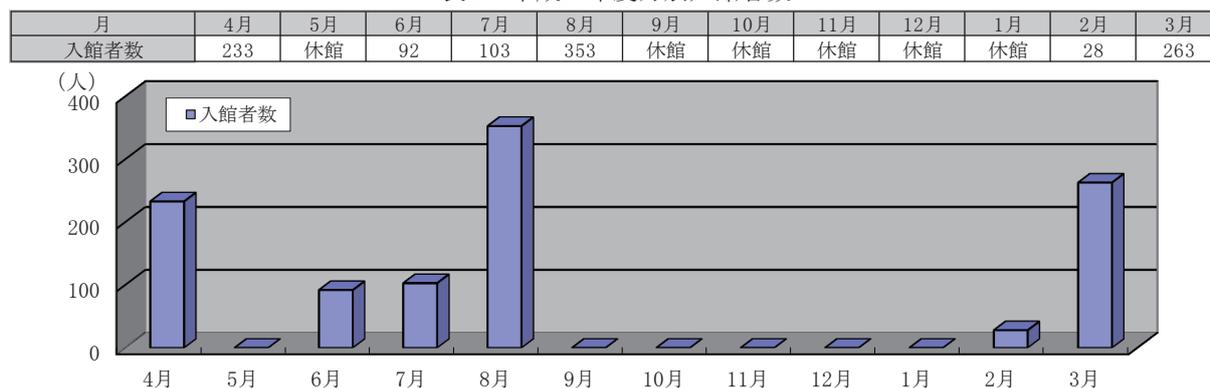


表24 平成24年度月別入館者数



第1節 資料館における展示・情報公開活動

1. 第33回企画展『遺跡調査に見る山口大学の原風景1 中世 村落 誕生』を開催

山口大学吉田構内が所在する吉田遺跡は、旧石器時代から江戸時代までの埋蔵文化財を包蔵する複合遺跡として著名であるが、既往の調査により各時代の遺構・遺物の分布に疎密があることが明らかとなっている。

判明している事実と問題の一つに、遺物は豊富に発見されるものの鎌倉時代の集落が確認できないこと、そして後続する室町時代の集落は遺跡の複数地点で検出されるものの、集落範囲が不明確であることが挙げられる。

平成20年度に実施した吉田遺跡での発掘調査において、新たに室町時代の集落跡が2地点で確認されたことを受け、平成24年度の企画展では、吉田遺跡において中世集落が何時、どのような範囲に成立するのかを考察する展示を開催することとした。展示では、これまでに室町時代から江戸時代の遺構・遺物が確認されたキャンパス4地点(学会館敷地から大学就職支援施設〈O-HARA〉敷地、山口大学動物医療センター北側地点、メディア基盤センター棟敷地、第2体育館敷地)から出土した実物資料を公開するとともに、江戸時代中期に描かれた古絵図『地下上申絵図 吉田村清図』(山口県文書館所蔵)に描かれている村落と、遺跡において発見された集落域との比較展示を行った。特に遺跡調査から復元される室町時代の集落域地図と江戸時代の絵図、本学統合移転前(昭和40年頃)の吉田地区航空写真、現在(平成24年)の吉田地区航空写真の比較は観覧者には好評であり、およそ400年間、ほぼ景観を変えずにいた吉田の地が、本学の移転とともに急変貌を遂げることに興味を示していた。

5月28日(月)～8月31日(金)の会期中、548名の来館者を迎えることができた。「山口大学の原風景」は、今後も継続的に時代を遡りながらシリーズ化していく予定である。

【註】

1) 田畑直彦(2012)「新教育研究棟新営に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報6-平成20年度-』,山口

横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報6-平成20年度-』,山口



写真 240 第33回企画展ポスター



写真 241 展示の様様

2. 第34回企画展『学生発！行動展示 遺物と向き合う』を開催

第33回企画展終了後の平成24年9月以降、埋蔵文化財資料館は学内埋蔵文化財保護業務が多忙となったため、予定していた展示活動を実施できないまま5ヶ月間休館することとなった。本学学生および教職員、そして地域の皆さまにご迷惑をかけたことをお詫びしたい。

屋外での発掘調査と残務処理を終えた平成25年1月に、3月初旬開催予定の展示までの間の展示室の活用として、近年心に温めていた短期間の展示に挑む事にした。その展示テーマは「行動展示」である。旭川市旭山動物園の取り組み以降、マスメディア等により取り上げられることが多くなった展示方法であるが、生物系や自然科学系の博物館施設でこそ可能な手法であり、歴史民俗系の博物館とは縁遠いものと感じていた。その一方で、近年は博物館の作業室やバックヤードを部分的に可視化する動向もあることから、当館でも取り組む価値はあると考えていた。

考古学は、実物資料に直接的に接して情報を読み取る学問である。通常はその実物資料と獲得した情報を用いて展示を行うが、今回の企画展では、本学において考古学を学んでいる学生が、研究素材となる遺跡出土資料を前に、どのような行動をとっているのかを公開すると同時に、その行動内容のパネル解説を行うことにした。

展示には、人文学部考古学研究室3年生の男女7名にボランティアスタッフとして協力いただくこととなった。ただし、後期授業および後期試験終了後に開催せざるをえず、長期間の展示も学生の負担となるため、会期は企画展として過去最短の2週間、平成25年2月12日(火)～2月22日(金)までの開催とした。会期中約30名の方々に入館いただいたが、遺跡出土資料に対し熱心に向き合う若者を熱心に観察する姿が見られた。短期間の展示だったが、意義のある取り組みであった。当館では、過去にマネキンや手の模型などを用いて、現地での発掘調査から発掘調査報告書刊行までの一連の埋蔵文化財調査を紹介する展示を開催した事があるが、やはり実物(今回の場合「人間」)が持つ情報量の多さにはかなわない、と感じた次第である。

【註】

- 1) 第25回企画展『ロマン発見～考古学者の鋏～』(平成20年4月1日～6月20日)、第26回企画展『ロマン発見～考古学者の筆～』(平成20年7月14日～10月10日)



写真 242 第34回企画展ポスター



写真 243 展示の様様

3. 山口県大学ML連携企画巡回展『風化させない記憶への一步～自然とともに～』

梅光学院大学会場・徳山大学会場・山口福祉文化大学会場を巡回

昨年度刊行した『山口大学埋蔵文化財資料館年報9-平成23年度-』では、山口県大学ML(ミュージアム・ライブラリー)連携企画巡回展『風化させない記憶への一步～自然とともに～』山口大学会場の模様を報告した。この企画巡回展は、平成23年(2011)3月11日に東日本を襲った大震災の復興支援として計画されたものである。震災後1年となる平成24年3月11日より山口大学会場を皮切りに、その後山口県西部、東部、北部を以下のスケジュールで巡回した。

巡回スケジュール

- ・山口大学会場 平成24年(2012)3月11日(日)～4月27日(金)
- ・梅光学院大学会場 平成24年(2012)年5月11日(金)～6月26日(火)
- ・徳山大学会場 平成24年(2012)年7月2日(月)～8月10日(金)
- ・山口福祉文化大学会場 平成24年(2012)年10月1日(月)～11月9日(金)

山口県初の大学所蔵学術資料巡回展となった当事業であるが、主催である当館と本学図書館、梅光学院大学博物館・図書館、そして展示協力いただいた梅光学院大学東北ボランティア実行委員会諸氏が一致団結し、会場を提供いただいた徳山大学、山口福祉文化大学の方々の多大なる支援を受けながら、無事巡回を終えることができた。関係の皆さまに感謝を申し上げたい。

各会場とも多数の観覧者を迎えることができ、設置したメッセージ布には被災者・被災地への声が溢れた。また、会場にて募った被災地への義援金は、4会場を通じて103,083円に達した。この義援金は、当初の計画通り「公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団<東日本大震災被災文化財の救援と復旧のため>」宛に送金させていただいた。会場に足を運んでいただいた皆さま、義援金とともにメッセージを寄せていただいた皆さまにお礼申し上げます。

各会場では1～2回ミュージアムトーク(展示解説)を開催したが、こちらも多くの参加者に恵まれた。各会場とも展示解説後には様々な質問が飛び交い、熱気を帯びた会となった。

巡回展示終了後、山口県ML連携事業の活動を広く世に周知させるため、梅光学院大学図書館・山口大学図書館の尽力により、平成24年11月20日から22日にかけて神奈川県パシフィコ横浜にて開催された「第14回図書館総合展」のポスターセッションに参加できたことも大きな成果と言える。

最後に、震災後2年が目前に迫った2月19日から2月21日にかけての3日間、被災地にて成果報告展を含む活動を実施した。初日は東北学院大学災害ボランティアステーションを訪ね、事業報告会と成果展示、メッセージ布等の贈呈を行い、2日目は博物館と図書館チームに分かれ、被災地の大学博物館・図書館を訪問した。当館スタッフは、東北学院大学博物館にて災害時の博物館の状況や以降の対応、津波災害に対する博物館施設の備えなど伺い、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館にて震災後の博物館の被害や対応措置、さらには宮城県・仙台市における大学博物館の連携状況など、貴重な話を伺うことができた。3日目は、今回の連携事業を「自然とともに」というテーマで実施していることから、被災地の環境の復興状況を知るため、仙台市荒浜地区南長沼周辺を訪問した。訪問地の田畑には新たな土が入られるなど、復興の息吹が感じられたが、復興の道のりの長さを強く感じさせられた。

およそ1年をかけて実施した今回の山口県ML連携事業であるが、被災地から遠く離れた本州最西端に暮らす我々は、風化させない記憶への第1歩を踏み出したに過ぎない。また山口県大学ML連携事業も、小さな1歩を踏み出したばかりである。今後は、大学の知の拠点とも言える博物館と図書館の存在意義を問い続けながら、活動を展開させて行きたいと考えている。



写真 244 梅光学院大学会場展示解説(山大埋文)風景



写真 245 梅光学院大学会場展示解説(山大図書)風景



写真 246 徳山大学会場設営風景



写真 247 徳山大学会場展示解説(山大図書)風景



写真 248 山口福祉文化大学会場展示見学風景



写真 249 山口福祉文化大学会場展示解説(山大埋文)風景

4. 平成24年度山口大学所蔵学術資産継承事業成果展「宝山の一角」を共催にて開催

本学には、所蔵される貴重学術資料の保存・修復・整理事業を実施するため全学委員会として「山口大学所蔵学術資産継承検討委員会（以下「委員会」と記す）」が組織されている。委員会は平成23年（2011）に大学会館にて学内向けの事業報告会を開催しており、成果展示の開催によりさらなる事業の可視化を目指すとのことであったが、本学には大学博物館が設置されておらず、当館以外に適当な開催施設も存在しないこと、さらには委員会の担当部局が当館が所属する大学情報機構であること、筆者が委員会に設置されている「博物・標本専門部会」の部会長に就任していることなど様々な理由から、当館の共催にて成果展示「宝山の一角」を開催することとなった。

展示は前期（平成25年3月2日～4月25日）、後期（平成25年5月7日～6月28日）の2部構成となっており、前期は当館所蔵の考古資料「見島ジーコンボ古墳群 第151号墳出土遺物」、理学部所蔵の鉱物・岩石資料「喜和田鉱山のタングステン鉱」など、教育学部所蔵の美術資料「西山陽平作品」、図書館所蔵の文書「忠正公論将士刷物序・山縣有朋」ほかと典籍「源氏物語」43巻43帖が、後期は当館所蔵の考古資料「見島ジーコンボ古墳群 第154号墳出土遺物」、工学部所蔵の鉱物資料「珪孔雀石」など、教育学部所蔵の美術資料「関根伸夫作品」、図書館所蔵の文書「山田顕義宛井上毅書簡」ほかと典籍「水路路程」8巻6冊が、通期で農学部所蔵の民俗資料「とえ馬」などが出展された。

通常考古資料のみを展示している当館であるが、平成20年度以降は学内連携企画展と称して、他部局所蔵の学術資料展や文字資料とモノ資料との連携企画を実施してきた。今回は同時に多分野の貴重資料が集結する事もあり、展示室の管理には細心の注意を払った。

前期展が山口商工会議所主催の「山口お宝展」への参加も兼ねていたこともあり、前後期通じて来館者に恵まれ、最終的には入館者数は1,047名に達した。この委員会事業成果展「宝山の一角」は、現在（平成27年度）まで継続して共催開催しており、本学の名物企画となりつつある。当館としても他分野の資料と身近に接することで様々な刺激を受けているが、本来的にはこの様な企画はもう少し設備の整った環境で開催すべきと考える。卑下するわけではないが、当館の展示室は約35㎡と極めて狭小であり、展示ケースも限られ、免震機能等も万全ではない。各部局の学術資料も保管場所が限られ、多くの資料が適切な環境下で管理できていないと聞く。本学も大学博物館等の設置を検討すべきと考える。



写真 250 前期展展示解説の様様

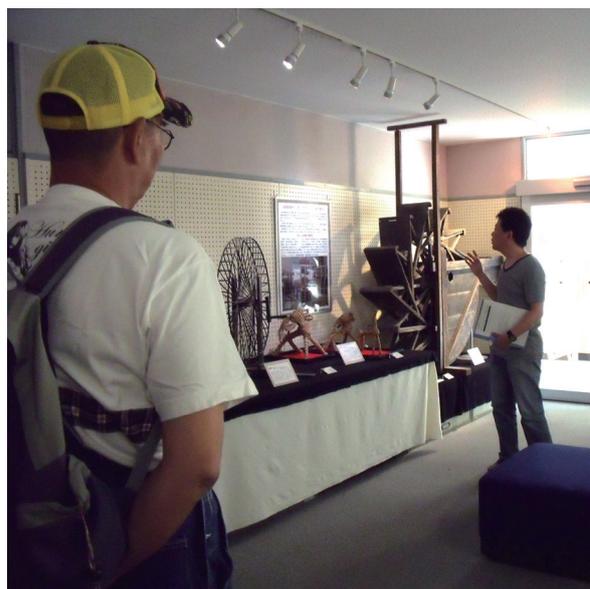


写真 251 後期展展示解説の様様

5. 平成24年度刊行物

1. 『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成21年度－』を刊行

平成24年度は、平成21年度に実施した構内遺跡発掘調査概報と資料館活動報告を所収した年報を刊行した。発掘調査関係としては本発掘調査1件(光)、予備発掘調査4件(吉田)、工事立会29件(吉田23・白石3・小串1・光2)の成果が掲載されている。平成21年度は第1期中期計画の最終年ということもあってか、開発工事が多発した。本来なら発掘調査にて対応すべき事案も多かったが、発掘調査同等の精度で工事立会を実施することで対応した。

館の活動報告としては、展示・公開活動として7件の企画展示等事業と、2件の社会教育活動を報告している。その他、館員横山による「下松市御屋敷山古墳出土の出土遺物」と題する館蔵品調査報告を付篇として所収している。

2. 館蔵資料調査研究報告書『見島ジークンボ古墳群 第152・153・155・156号墳出土資料調査報告』を刊行

平成22年度に開始した事業であるが、引き続き、見島ジークンボ古墳群の出土資料調査及び報告書を刊行した。

平成24年度は、当館の所蔵資料は少ないものの、萩博物館収蔵品には銅鏡など貴重な資料が見られる第152・153・155・156号墳を調査の対象とした。萩博物館での資料調査は、平成24年(2011)4月24日～5月18日にかけて館員横山・松浦が実施し、当館所蔵品と合わせ報告書を刊行した。なお、近年第152号墳出土の可能性が極めて高い資料群が埋蔵文化財資料館にて発見されたため、近い将来に再調査および報告をおこなう所存である。その他、第155号墳出土人骨に関し、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸・松下真実両氏に玉稿を賜った。

3. 季刊山口大学埋蔵文化財資料館通信 第22号『てらこや埋文』を刊行

平成18年(2005)より刊行している季刊広報誌である。平成24年度中は埋蔵文化財保護業務が多忙であったため、平成23年度同様「春夏秋冬特大号」と称し、年度末に頁数を倍増して刊行した。巻頭頁には平成24年度の当館の活動概要、2・3頁は文化財保護活動、4・5頁には展示活動、6頁には公開授業の様式、7頁には当館事務補佐員の連載である内業業務紹介を掲載した。また、年度末に刊行した「山口県大学ML連携事業報告」についても、当館が編集・発行をおこなっている。

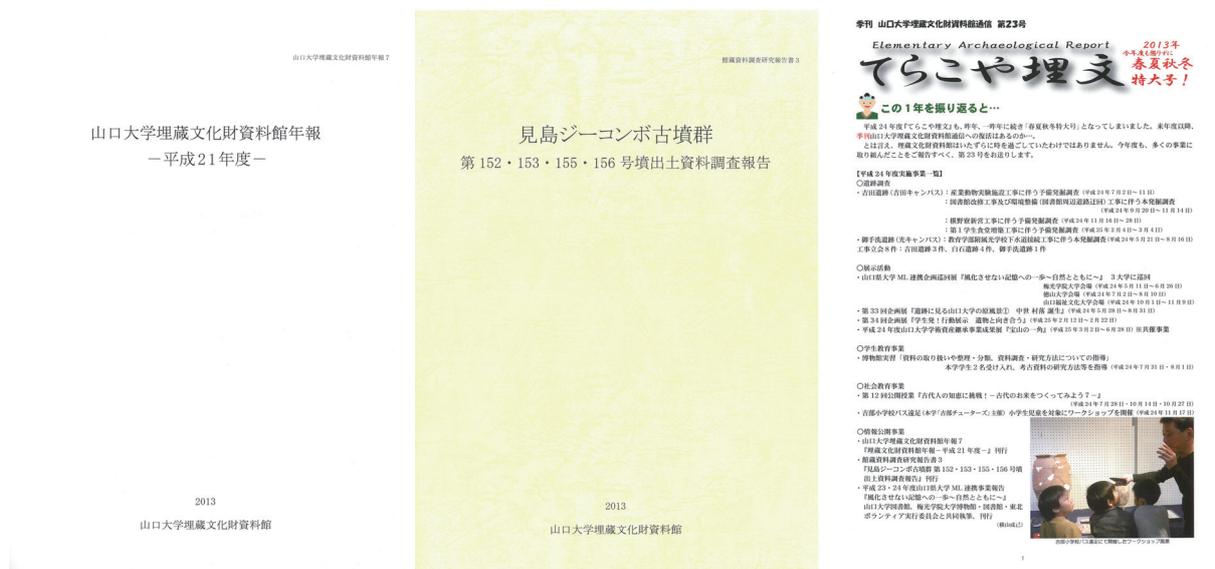


写真 252 平成 24 年度埋蔵文化財資料館刊行物